

医療の世界で生きる 女性たち

WOMAN in MEDICAL

伊丹市／皮膚科医 日浦結衣さん



「医師は素晴らしい職業

同じ道を進んでくれたら」

昨年の11月に開業した真新しいクリニックで副院長を務める日浦さん。1歳半になるお嬢さんを保育園に送り迎えしながら、病院と家庭の両立に日々奮闘する。院長は公私に渡るパートナー。交際1年足らずのスピード結婚で、子宝にも恵まれた。そして昨年の開業である。

まだ年若い二人の医師が開業に乗り出す苦労は相当なものだっただろう。設備からスタッフまですべてが整っている勤務医時代とは勝手が違う。「院長が殆どこなし、私は雇われていただけですから」と笑うが、ゼロから立ち上げ、夫婦で切り盛りしている充実感が溢れている。

日浦さんは元々、医師になる気はなかったのだとか。自分の母親のように「家事を全うする専業主婦に」と思っていた。そこに開業医である

父親から物言いが付く。「医師は素晴らしい職業だから目指してみたら」と。実際に医学を勉強してみるとその楽しさに気付き、晴れて皮膚科を専門とする医師となった。

丁寧に触診し、薬も処方するだけではなく塗布する量から塗り方まで親身に説明する。患者が安心して帰宅してほしいという思いからだ。

今後の目標を訊ねると、それは院長に聞いた方が、と躊躇しながらも「当院は内科から外科、皮膚科まで幅広いので、地域の方々が相談に寄っていただけるようなクリニックになれたら」と明るい笑顔で答えてくれた。控え目ではないながらも、ひとりの医師として院長をリスペクトし、妻として夫を支え、母として愛娘に心を配る。今日も彼女は影に日向に奮闘中である。



伊丹市のひうらクリニックにて、ご夫婦揃っての撮影にご協力いただいた。院長先生の座右の銘は「どうにでもなる」。「人事を尽くして天命を待つ」というような思いをざっくばらんな言い回しで表しているのだろう。多忙を極めるお二人の一番の癒しはお嬢さん。まだまだ先の話だが、将来は同じ医師の道を進んでくれればと話してくれた。

文／斎藤重雄 写真／中谷翔